足を聖種とし、少欲は現在の一銅銭を取らず難をなし未来に事転を得ず、喜足は現在すでに事転を得るという。過去諸仏は糞掃衣を称賛し給うので、提婆達多は裁縫をして衣を着ける習慣を、外道沙門に、驕ることなく示そうとしたと考えられる。日本において裸で祀られることのある弁財天像も、糞掃衣を着け給われば、過去諸仏と提婆達多の功徳があると思われる。論に、随所で得る衣服の喜足は、諸悪を損減し、諸善を増長し、自他の身心を厳浄すると、具体的な効果が述べられる。

提婆達多は将来を見据え、上人の五法を設けて僧団の存続を図ったのではないだろうか。

アティシャの『マントラ義入』について

望月　海慧

十一世紀にインドからチベットに仏教を伝えたアティシャ（九八二―一〇五四）は、修行の次第を簡略にまとめた『菩提道灯論』の著者として知られているが、早くから密教への関心を持っており、七〇を超える密教の著作も伝わっている。『菩提道灯論』においても、顕教である波羅蜜乗だけでなく、その上に密教である真言乗があることを述べている。本稿では、この真言乗の優位性を説いた『マントラ義入（*Mantrārthāvatāra, s.l.ggs kyi don jug pa*）』（P. No. 4856）を取り上げ、彼が説いた真言の意味について考察する。

まず、本論の表紙には、「ディーパンカラの十三のマントラの伝承に入る」と述べられている。この数字の意味は、同じ著者の『堆薪儀軌（*Citāvidhi*）』（P. No. 4868）の奥書から知ることができる。そこには十三の伝承が、「マントラの意味に入ることと、灌頂と、三摩耶の秘密と、天宮の布施と、水供養と、護摩と、天供養と、寿成就と、死を欺くことと、命終の論書と、荼毘護摩と、七句と、小像の設置」と述べられており、この最初のものが『マントラ義入』で、最後のものが『堆薪儀軌』である。その間の十一は、チベット大蔵経（デルゲ版とチョネ版では欠）において、この二つの文献の間に収録されている『灌頂解説（*Sekopadeśa*）』『三摩耶秘密（*Samayagupti*）』『天宮施（*Saudadāna*）』『撒水儀軌（*Peyokṣepavidhi*）』『護摩儀軌（*Homavidhi*）』『天供養次第（*Devapūjākrama*）』『寿成就法（*Āyuḥsādana*）』『贖死（*Mṛtyuvañcana*）』『死時論（*Mumūrṣu-śāstra*）』『荼毘護摩（*Śmahoma*）』『七句儀軌（*Saptaparividhi*）』にあたる。このことは、これらの十三の文献が彼のマントラの伝承として一緒に伝わっていたことを示している。また、『堆薪儀軌』の奥書に、「十三の項目に自分で注記を添えた」と記されているように、これらの文献を伝えた者による注記が小さな文字で文中に記されている。

この最初におかれた『マントラ義入』の内容を簡単に示しておく。まず、著作目的は、論理学者たちが、真言乗と言う意味は何か、どのように声に入る原因となるのか、区別はどれくらいか、どのように道を進むのか、結果はどのようなものなのか、と質問をすることに対して、彼らの分別を断じるために真言の意味を説く、と述べられている。これらの五つの問いに対する回答で本論は構成されている。まず、真言乗の意味については、「三乗より出離して一乗の結果にとどまる」と言う『文殊

幻網（*Mañjuśrīnāmasaṅgīti*）』第一三六偈を引用し、三乗を原因、一乗を結果とした上で、その明知と事物への執着を離れることを真言乗とする。第二の問いである声に入ることについては、マントラにより導かれることで意識を守護する目的をもつとし、トリビタカマーラの『三理趣灯（*Naratrayapradīpa*）』（D. No. 3707, Tsu 16b3-4）の引用に依り、真言乗は、愚かでなく、多くの方便をもち、難行でなく、利根の境となるので、特別であるとされる。第三の区別については、身金剛と語金剛と意金剛と三摩耶金剛の灌頂により身口意を浄化する秘密のマントラと、明呪と、心髄と、印契とされる。第四のどのように道を進むのかについては、鈍根の者は自分の分別のままに進み、中根の者は天も幻の自性であることを知り、利根の者は顕現を心に集め、心は無自性で、大楽も意味のないものとする、と三根に分けて解説される。最後の結果をどのように得るのかについては、最高の修習の最後に生じる識と最高の大楽とにより涅槃の界と仏法と十八不共の主体となって獲得するとされる。

以上のことから、「マントラの意味に入る」とは、真言乗の意味と、そこに入る原因と、区別と、進む在り方と、結果の獲得の五つの意味を、論理学者に示したものである。「マントラ」は、波羅蜜乗に対する真言乗の優位性も含意しており、その意味を示すことからアティシャ十三のマントラの伝承が始まっている。

パーリ仏教文献における殺生と自殺に関する道徳観

川本　佳苗

本研究では、パーリ仏教文献における道徳的善悪の基準を調査し、自殺が殺生に含まれるかという問いを検討する。その検討の結果から、その道徳観が、現在の東南アジアを中心に広がる上座部仏教社会において、どのように影響してるかという考察へも繋げていく。

本研究の構成は三つに分けられる。第一部では、パーリ仏教文献で説かれる善悪の基準を理解する。その根拠として、仏陀が息子ラーフラに対して行為の善悪を訓戒する『アンバラッティカ・ラーフラ教誡経』と、仏弟子アーナンダがパセナディ王と問答を続ける『バーヒッティカ経』の二経とを考察する。二経から、行為者自身や他者に与える影響が行為の善悪基準として重要であることがうかがえる。どちらの経においても、身口意によっていかなる行為をなす際も、自身・他者・両者に対する影響が善悪基準に関わることが分かる。一方で、自殺という行為は、行為者自身の身体を傷つけはしても他者に同様の危害を与えない。ゆえに、この二経で説かれる道徳観に従って悪行為と判断され得るかどうかは不明である。

第二部では、殺生に対する仏教観を明らかにする。殺生を慎むことは、仏教徒なら実践を奨励される五戒に含まれる。『正見経』において、悟りの実践である八正道の第一要素である正見は、善悪の識別を意味するが、殺生は悪業の一つであるとして説かれる。この経の注釈書では殺生の定義と深刻度が分析されており、その定義には「対象を殺そうという意識をもつ」と